

## 『御花畠庭園』再建を提案する

武間 明雄

はじめに、我が郷土徳島県は、「映画・眉山」「カラオケ演歌・剣山」近くはNHKで今秋より放送開始の連続テレビ小説「ウェルかめ」のロケ開始など、相次ぐ発表により人気は高く眉山・剣山・吉野川・県南の観光地や、阿波踊りなどの知名度がより高くなり（観光立県）としてさらなる脚光を浴びている。

加えて「高速有料道路の低料金対策効果」と相俟って前年に比べ来徳観光客は増加の傾向にあり、将来に向けて明るい兆しが見えて来た。

ただ、私がかねてから憂いているのは、地元県民は勿論「県外からの観光客」から指摘されている《眉山頂上》に観光施設がない事である。

折角“ロープウェイ”で山頂に降り立っても、素晴らしい徳島市内の「パノラマ風景」「パゴダの塔」など散策の地はあるものの、

何か物足りない環境である。

この際、徳島藩の藩政時代存在した『御花  
島庭園』を当時の規模を縮小してでも『眉山  
山頂に再建』される事を提案したい。

文献\*1によると、『御花畑庭園』は藩政時  
代十二代藩主「斉昌」が隠居して、徳島城の  
西の丸に入り瓢箪島と称した西隣（現在の徳  
島市立内町小学校・市立体育館、旧西の丸運  
動場西側）に作庭したもので、庭内には、数  
奇屋橋や古跡、名勝を設け、掘り抜き井戸を  
掘り、川を流し、大池を設けた広大な林泉で  
あった。

この庭園は、「旧徳島城表御殿庭園」の様  
な築山泉水庭とか、巨石を配した枯れ山水で  
なく、平庭をベースとした園内に、逸品の景  
石や金石碑を配し、井戸からの湧水を高地水  
取りのカラクリによって引き揚げ、滝石から  
落とす工夫や、深山幽谷から海浜の風景に至  
るまでの名勝や古跡を再現し、橋や腰掛け、  
待合や茶屋、などの数奇屋を設けた由緒ある

名物であった、と記録\*2がある。

この造園にあたっては、三代藩主「光隆」から代々仕える御庭方棟梁、堤氏五代目の「立助貞好」と伝えられている。

この庭園の素晴らしさは、板東源十郎喜古が『御花島景観目録』\*3に概要を示されている。

しかし、この立派な御花島屋敷、庭園も廃藩後の旧城取り壊しの際、入札され、地盤石まで持ち出され、跡地に作られた徳島刑務所の建設に伴い破壊され、跡形もない。

今では、「御花島庭園十五勝（仮題）」や「御花島差図」\*4等の絵画でしか見る事が出来ない状態である。

この様な徳島城西之御丸にあった御花島は歴史価値のある素晴らしい庭園で「西之丸御花島之圖」\*1を見ると香川県の「栗林公園」に遜色は無く、岡山県の「後樂園」に匹敵するほど立派な庭園であったとの記述がある（徳島城と町まちの歴史・河野幸夫著）\*5。

このように全国に誇れる徳島の名園が現在実在していない事は徳島県民として慙愧に堪えず、誠に残念な事である。

再建を希望する眉山山頂には、昭和四十年代「スカイランド眉山」と言う娯楽観光施設があつて〈メリーゴーランド〉〈コーヒーカップ〉〈ジェットコースター〉などが常設され、娯楽施設の少なかつた当時、家族連れで大変賑わつたものである。

尚、出来れば、付帯娯楽施設として遊具も設置して欲しいものである。

この様な計画施設の完成後は賑わいを見せ関西？四国有数の《一大観光地》として客を集め、徳島県の飛躍発展に寄与する事は間違いないと思われる。

又、この『御花畠庭園』を実現するためには相当な資金を必要とするが、期成同盟会の様な組織を作り県民に訴え【募金活動】により、幾分か資金を調達出来ないか、資金の捻出方法を考えこの事業の完成を訴えたい次

第 である。

おわりに

私がこの庭園を選んだ理由の一つには次の様な思い入れがある。

『徳島藩士譜』\*6によると藩士のうち「初代武間三郎平義秀」の子「三代茂一郎頼章」享保五子年（1720相続1743没）三人扶持方御支配九石、銀札判摺御奉行が、『御花畠日帖役』として奉公した経緯があり、私の母「武間キクエ」の紋付（着物）に付いている「家紋丸の中尻合ワセ三ッ雁金」であることから、ご先祖で無いか、と親しみを持ち、数多い藩士のうち、御花畠の要職に就いていた「茂一郎」に日の目を当て、何かの機会に発表したかった為でもある。

参考までに、高百石で医師、御花畠御番、御本城御番で「武間張庵」の子「三代周三伯敬」があった。

《 参 考 文 献 》 文 中 の \* 番 号 は 、 次 の 各 文 献 を  
参 考 に し た こ と を 示 す 。

\* 1 「 徳 島 城 」 編 集 委 員 会 編 『 徳 島 城  
( 徳 島 市 民 双 書 ・ 2 8 ) 』、徳 島 市 立 図 書 館 、  
1 9 9 4 年 。

2 8 0 頁 に、「 西 之 丸 御 花 島 之 圖 」 が 記 載  
さ れ て い る 。

\* 2 徳 島 市 総 務 部 市 史 編 さん 室 編 「 御 花 島  
屋 敷 の 庭 園 に つ い て 」 『 徳 島 市 史 だ よ り  
第 3 号 』、徳 島 市 総 務 部 市 史 編 さん 室 発 行 、  
1 9 7 7 年 、 3 ～ 6 頁 。

\* 3 板 東 源 十 郎 喜 古 『 御 花 島 景 観 目 録 』、  
1 8 7 5 ( 明 治 8 ) 年 。

前 掲 \* 2 『 徳 島 市 史 だ よ り 第 3 号 』  
( 3 頁 ) 参 照 。

\* 4 蜂須賀文書 『御花畠差図』、国立史料館所蔵。

前掲\* 2 『徳島市史だより 第3号』  
(3頁) に記載参照。

\* 5 河野幸夫 『徳島・城と町まちの歴史』、  
聚海書林、1982年。

\* 6 宮本武史編 『徳島藩士譜 中巻』、  
徳島藩士譜刊行会、1972年。

\* 7 栗井 薫 『阿波国・家紋大図鑑 全面  
改定版』、徳島家紋研究会、1998年。